

活平神社に残る丸岡キサノ奉納の絵馬

持田 誠¹⁾

Makoto MOCHIDA, 2020. The Ema Tablet dedicated by Kisanō MARUOKA at Katsuhira Shrine
in Urahoro, Tokachi region, Hokkaido.

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 20: 21-29.



図1 活平神社拜殿に掲げられている、丸岡キサノ奉納の絵馬

はじめに

浦幌町字活平に所在する活平神社には、1921（大正10）年9月に奉納された絵馬が存在する（図1）。現在、浦幌町内に残っている社寺所有の絵馬のなかでは、博物館で把握している限り、厚内神社に残る1909（明治42）年奉納の絵馬（持田 2019）に次いで古いものである。

この絵馬には、奉納者として「広島県人 丸岡キサノ」の名前がみられる。また、一般的な絵馬が板に絵で馬を描くのに対し、この絵馬は刺繍によって製作されているという、大きな特徴がある。

しかし、『浦幌町史』などの公刊資料には、丸岡キ

サノに関する記述は無く、またこの絵馬についても言及されている資料は見当たらない。

そこで博物館では、丸岡キサノの孫にあたり、丸岡家の歴史について独自に調査を実施してきた丸岡繁喜氏（現在は北広島市に在住）から聞き取りを行なった。次に、丸岡家に残る写真や家系図、キサノと、キサノの長男である栄三氏の手記などを実見し、町史や部落史などの関連資料と照合しながら内容を検討した。

本報では、これらの調査をもとに、丸岡キサノとはどういった人物なのか、なぜこの絵馬が奉納されたのか、などの資料情報の収集と、地域における絵馬の地方的な意義について検討した。

1) 浦幌町立博物館 〒089-5614 北海道十勝郡浦幌町字桜町16

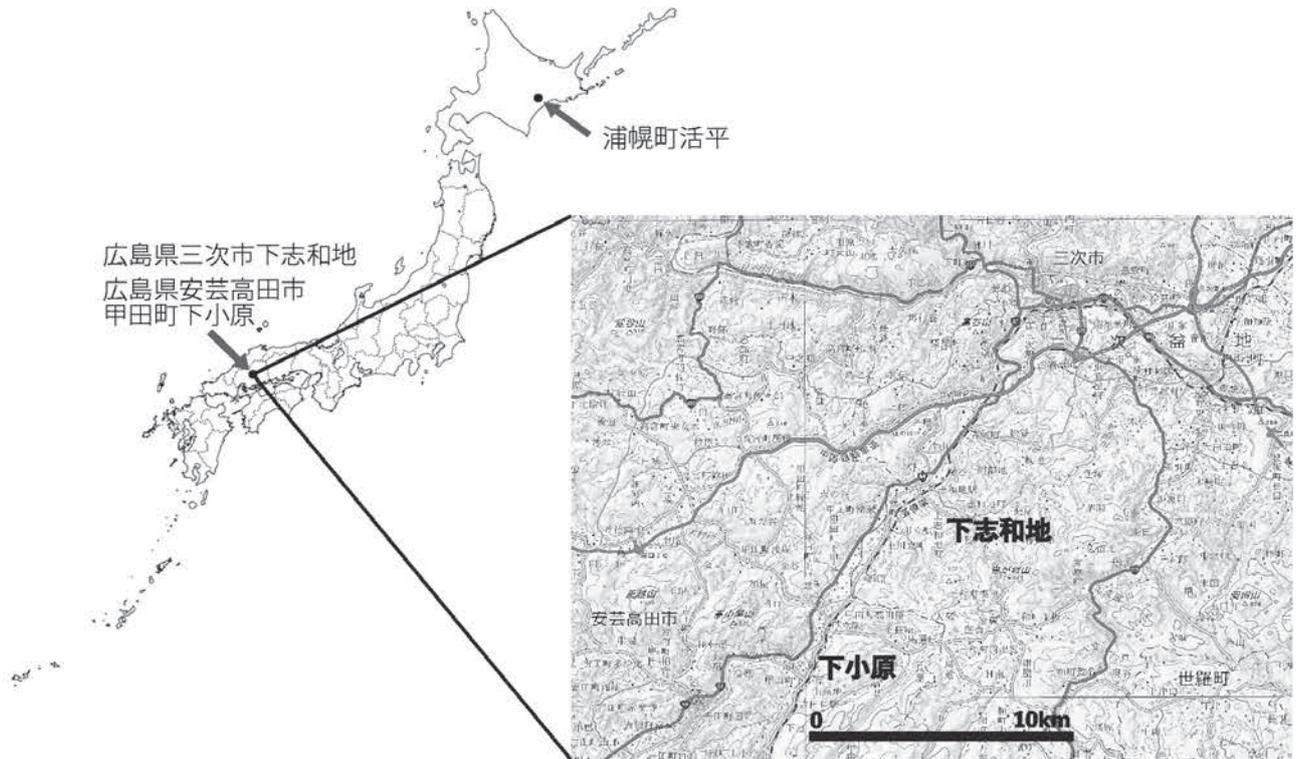


図2 丸岡キサノの生家の所在した広島県三次郡川地村下志和地（現、三次市下志和地町）と、丸岡三一の生家のある広島県高田郡小田村大字下小原（現、安芸高田市河田町下小原）の位置。安芸高田市方向から三次盆地（地図では三次市）方面へ流れる江の川の流域で、川に沿ってJR西日本の芸備線が通じている。下志和地と下小原は隣接している地域であることがわかる。国土地理院1:200,000地形図「広島」「浜田」より作製

絵馬の概要

2017（平成29）年11月21日に、浦幌神社宮司の背古宗敬氏の立ち会いのもと、活平神社へ出向き、絵馬について現地調査を実施した。

丸岡キサノの絵馬は、ガラス入り額縁に額装された状態で、活平神社拝殿内に掲出されている。このため、拝殿に立ち入れば誰でも観覧することができるが、現在、拝殿自体が通常は施錠されている。

大きさはタテ38.6cm、ヨコ49.2cmで、絵馬本体の厚さは約1.9cmである。素材は、木製の板の上に、馬の絵の刺繍があしらわれているものである。

刺繍の上に「奉納」「大正拾年九月 広島県人 丸岡キサノ」の文字が書かれており、この絵馬の奉納者と奉納年月を伝えている。

なお、活平神社内には、1938（昭和13）年林篤奉納の虎の絵があるが、これも刺繍でつくられている。刺繍による絵馬、奉納絵は、浦幌町内の他の神社ではみられず、活平神社に特徴的なものである。

調査にあたり、壁から絵馬をおろして状態を点検したが、額装の背面などにはいっさい書き込みなどはみられなかった。

丸岡繁喜氏からの聞き取り

丸岡繁喜氏は、現在、北広島市に居住。中前建設株式会社浦幌出張所の所長を務めている。なお、後述するように、この中前建設（本社：本別町）も、丸岡家と関係の深い建設会社である。

丸岡繁喜氏は丸岡キサノの孫にあたる。かつて北海道浦幌高等学校（2010年に廃校）で郷土史研究部に所属していた丸岡氏は、丸岡家の歴史について精力的に資料を収集し、独自に調査が続けられている。

博物館では、丸岡氏に來館していただき、丸岡キサノに関する話を中心に、聞き取りを実施した。

【実施日】2019（令和元）年5月10日

【場 所】浦幌町立博物館学芸員室

【方 法】丸岡繁喜氏が來館、持田誠学芸員が聞き取り

【概 要】

（1）丸岡キサノについて

学芸員 丸岡キサノを存知しているか？

丸岡氏 知っている。幼い頃に世話になった。

学芸員 キサノとのご関係は？

丸岡氏 孫にあたる。



図3 山田キサノ（丸岡キサノ）。17歳のとき大阪で撮影した写真とされ、年齢から1912（大正元）年の撮影と推察される。丸岡繁喜氏所蔵



図4 丸岡三一。「明治四十三年四月 二十一歳ノ時」と裏書きがある。1910年に安芸吉田の明治館で撮影したもの。丸岡繁喜氏所蔵

学芸員 丸岡キサノの生年月日と没年月日、現在の墓所はどこか？

丸岡氏 現在の墓所は浦幌町の浄福寺にある。生年月日・没年月日は後日確認して連絡する。

学芸員 旧制を山田キサノというらしいが、この山田家も広島県なのか？

丸岡氏 そのとおり。丸岡家と山田家は近い〔図2参照〕

学芸員 丸岡キサノ本人が浦幌へ来た時期、理由は？

丸岡氏 大正5-6年頃ではないか。大正6（1917）年に夫である丸岡三一の父である助太郎が亡くなっており、その頃と思う →〔調査により大正7年であることが判明した〕

学芸員 どこにお住まいだったのか？

丸岡氏 最初に入ったのが浦幌町活平。その後、留真に住み、さらに浦幌市街（宝町・スポーツセンター付近）へ移った。

学芸員 絵馬には「広島県人」とあるが、広島県から北広島市へ入殖したのか？

丸岡氏 違う。自分はいま北広島市に住んでいるが、キサノと北広島市は関係が無い。山田キサノは広島県で結婚して丸岡となり、夫と共に浦幌町活平へ入殖した。

学芸員 入殖は団体入殖か？

丸岡氏 団体入殖ではなく、丸岡家もほかもバラバラに広島から入っている。最初に荒川時造が1906（明治39）年に活平に入っており、その後、丸岡三一・キサノ夫妻が、荒川を頼って入ったという。広島県では百姓をしていたが、次男三男などの分家は、土地も狭くて儲からなかった。三一は大工の腕前があったので、北海道へ渡って商売しようと思って来たのではないか。そのとき、荒川が世話をした。また、いまの中前建設（本別町）の中前も広島県出身で、これは丸岡を頼って来たらしい。また、浄福寺の2代目も広島県人。こうした広島県出身者がお互いを頼りながら、時間差で浦幌に入った。みな、その後も繋がり合っている。

（2）活平神社・絵馬について

学芸員 活平神社に丸岡キサノが1921（大正10）年9月に奉納した絵馬があるのを知っているか？

丸岡氏 写真でみたことがあるが、実物はみたことがない。

学芸員 活平神社との関わりは？

丸岡氏 よくわからないが、夫の丸岡三一は大工で、



図5 結婚後の丸岡キサノ(左)と三一(右)。前列の子供は左が長男の栄三氏(1928・昭和3年生)、右が長女の文子氏(1927・昭和2年生)のため、昭和初期の撮影と思われる。丸岡繁喜氏所蔵

活平や留真の橋(木橋)を作ったり、家を作ったりしていた。浄福寺の以前の建物も三一が作った。馬頭観音の建物も作った。なので、神社の関係でもなにか作ったりしていたのではないかと。当時、活平地区には大工がいなかったの、なんでもやっていたらしい。

学芸員 絵馬奉納の理由やきっかけはなにかあるのか?
丸岡氏 上記のような理由だと思うが、よくわからない。
学芸員 絵馬は、なぜ刺繍なのか?
丸岡氏 わからないが、器用な人で刺繍が得意だったのは覚えている。飾り物のぼんぼりを縫ったりしていた。また、刺繍は山田の親戚(キサノのお祖母さん)から習ったのだと、話していたのを聞いたことがある。

(3) 丸岡三一について

学芸員 キサノの夫である三一は、丸岡家の資料によれば、上浦幌で「大工の左甚五郎」といわれた技術を持つ名工とされているが、その記録はなにかあるか?
丸岡氏 文書での記録は無く、地域で伝えられてきた。ただ、実際に作った建物がいまでも残っており、美園の旧大柿さんの家がそうだという。いま



図6 前列左端がキサノ、後列左端が三一。三一の右隣の男性は、丸岡家本家の人物(三一の兄?)と思われることから、広島時代の大正期に撮影したと思われるが、詳細不明。丸岡繁喜氏所蔵

は誰のものになっているのかわからないが廃屋。牛車の屋根が独特の腰折れ屋根をしている。昭和三十年代までは、知人だった大柿さんが使っていた。今も中に棟札があると思うので、いちど確認したいと思っていた。

丸岡氏 丸岡三一の父は助太郎といい、三一は次男。祖父は与助という。与助の妻ユウは、旧姓を山田という。キサノはこの山田家の出身。広島時代に丸岡へ嫁いで、三一と結婚した。
丸岡氏 丸岡家はもともと江戸時代は丸山家といった。のちになんらかの理由で丸岡になった。むかしは、苗字が同じだとすぐに兵隊にとられるとかあったので、兄弟でも苗字を変えることがあった。その影響らしい。

(4) 丸岡キサノの人物像について

学芸員 丸岡キサノはどのような人物だった?
丸岡氏 やさしい人だった。怒ったり大声を出しているのを聞いたことが無い。外孫にも同じように良くしてくれていて、常に子供達に囲まれていた。未だに従姉妹が集まったりするのもその影響だろう。集まると、よくキサノさんに連れられて遊びに行ったという話になるので。三次の武士の出だということで、母親などは、背筋を伸ばさないなど姿勢が悪いと注意されたという。武士の出として、躰けには厳しかったのかも知れない。
学芸員 絵馬に「広島県人」と書いているところを見ると、広島県出身に誇りを持っていたように感じるが。
丸岡氏 そうだと思う。聞いたところによると、そもそもは、いずれ広島へ帰ろうという思いがあったらしい。だが、子供達が増えてくると、こちらにいる必然性が出来て、結局帰ることは無かった。広島県に対する思いはあったのだろう。



図7 1925（大正14）年の浦幌第六橋「掛け替え」工事における丸岡組の写真。人物は、前列右から太田、丸岡三一、竹当、高松、後列右から上村、杉江、井上と記載がある。なお、後列左端の井上という人物は、丸岡キサノの従兄弟にあたるという。
丸岡繁喜氏所蔵

丸岡キサノのおいたち

丸岡キサノ（旧姓：山田キサノ：図3ほか）は、1895（明治28）年に広島県三次郡川地村字下志和地で、長女として出生^{註1)}した。三次郡川地村字下志和地は、現在の三次市下志和地町^{註2)}にあたる。

山田家のあった下志和地は、中国地方の中心部にあたる三次盆地の南西部、江の川の上流域に位置する（図2）。JR西日本芸備線の志和地駅の南東側に、江の川の支流である板木川に沿って、標高300m前後の低い丘陵状の山地が連なっている、山間集落である。キサノはここで育ち、尋常小学校の高等科を卒業した^{註3)}。

キサノは、1915（大正4）年に、丸岡三一（図4ほか）と結婚する。三一の丸岡家は、広島県高田郡小田村大字下小原、現在の安芸高田市甲田町下小原にあたる^{註4)}。

甲田町下小原は、キサノの生家のあった下志和地を通る芸備線で3駅目の吉田口駅一帯で、江の川をさらに上流へ向かった位置にある。いわば隣接地域である。

三一は、父助太郎、母マサの次男として生まれた。なお、聞き取りで丸岡繁喜氏も語っているが、助太郎の母ユウ（三一の祖母）の旧姓は山田で、これはキサノの生家である山田家の家系にあたる。

1917（大正6）年に、三一の父、丸岡助太郎が亡くなる。これが節目になったのであろう、三一とキサノは、翌1918（大正7）年に北海道へ渡り、十勝郡浦幌村字活平へ入った。生没年から算出すると、三一が28歳、キサノが23歳の頃ということになる。広島から浦幌への行程についての記録はみつからない。

名大工だった丸岡三一

当時、活平には荒川時蔵・フユ夫妻が入っていた。荒川時蔵が活平へ入ったのは1906（明治38）年^{註5)}で、丸岡三一とキサノは、荒川を頼って浦幌へ来たという。

丸岡三一の母マサは、広島県高田郡美土里町横田の、菊池〔きくいけ〕豊之助の家系である。荒川家は、この菊池家の分家にあたり、同じ広島からの入殖者を熱心に世話していたとされる。三一が荒川を頼って浦幌入りしたのは自然なことで、家も隣接地に設けている^{註6)}。

三一とキサノが北海道へ来た理由ははっきりしていないが、丸岡繁喜氏によれば、もともと広島での丸岡家の土地は山間で狭く、なかでも次男では与えられる土地はさらに少なかった。三一はこうした状況下での将来を見越して、もともと得意だった大工の腕を北海道で活かそうとしたのではないかと語っている。

三一・キサノ夫妻が浦幌へ来たころ、活平地区には大工がいなかった。三一は1921（大正10）年に建設会社の丸岡組（丸岡建設）を興して初代棟梁となる。丸岡建設には、1925（大正14）年に瀬多来地区に架橋した浦幌第六橋掛け替え工事における記念写真が残されている（図7）。

丸岡繁喜氏の父（三一の長男）である丸岡栄三氏（図5, 8, 10に写真）の手記が残されている^{註6)}。これによれば、留真炭鉱（浦幌炭鉱の留真坑か？）の開坑で、三一は「炭住その他の建物を一手引受施工していた」とされる^{註7)}。



図8 留真時代の住宅前での写真。1935（昭和10）年前後の撮影。後列の男性が丸岡三一。前列左から次女の澄江、長男の栄三、三女のたづ子、キサノ、長女の文子（敬称略）。

丸岡繁喜氏所蔵



図9（左上）丸岡三一が1947（昭和22）年に建築した浦幌町字宝町に建てた家。1952（昭和27）年5月17日撮影。丸岡繁喜氏所蔵

図10（左）丸岡三一が宝町に建てた家の前での集合写真。左からキサノ、三女のタヅ子、三一、次女の澄江、長女の文子、長男の栄三（敬称略）。丸岡繁喜氏所蔵



水野（1989）は、活平神社の参道入り口に立つ馬頭観音について「活平の小堂字は丸岡大工の寄進されたものであり、毎年4月9日の祭りに併せ、牛馬の安全と発展を祈り参拝している」と記している。

丸岡繁喜氏によれば、このように、大工として手広く活躍していた三一のことを、上浦幌地区の人々は「大工の左甚五郎」と呼んだという。

三一とキサノは、ほどなく活平から留真へ（図8）、さらに戦後は市街地の宝町へと移転している。

丸岡栄三氏の手記^{註6)}には次の記述がある。

生れた所は浦幌町字留真（字瀬多来地区の入口近く）の山田正さん宅の隣地 親達は活平の荒川幸治宅向いより住宅を新築し引越して住いこの家にて四人兄妹が生まれたのです。

栄三氏は、1928（昭和3）年4月26日に留真で生まれており、正確な年月ははっきりしないが、大正末期から昭和初期にかけて、活平から留真へ移住していることになる。なお、その後、水害によりさらに留真地区の別の場所へ移住したとも記されている。

1948（昭和23）年12月には、留真から市街地の宝町へ住宅を新築して移転（図9、図10）。これが、三一・キサノの終の住処となった。

浦幌における広島県人の入殖

水野（1989）は「大正はじめ頃まで、活平に多数入殖されている広島県人によって、広島県の神楽が奉納され、当部落や近隣の人々の楽しみであった」と記している。

また、本別の「中前建設」が、1966（昭和41）年4月15日、活平神社拜殿の新築を担当したとの記述もある。この中前建設とは、現在本別町に本社を置く会社で、創業者を中前数一といい、やはり広島県の出身である。『活平小学校閉校記念誌かつひら』（事業部記念誌係1976）に、活平小学校の第30回卒業生として、中前数一自身が次のように思い出を書き記している。

私の出生地は広島県ですが、五才にして両親と死別し、六才の折姉とともに広島市を後にし佐古田の叔父を頼ってこの草深い活平の地に参りましたが、広島県_[ママ]丸出しの私たちに友達は異様な感を持ったようでした。

また、丸岡栄三氏^{註6)}も手記に以下のように記す。

活平の佐古田さん宅に同居していた中前数一さんが父三一の大工の見習いとして丸岡宅に同居し一緒に勤め歩いていたが、二十才で徴兵…〔以下略〕

中前氏は、終戦後に、栄三氏の妹（三一・キサノの二女）と結婚して本別へ中前建設を興し、以後、同社は活平神社の改築など、地区の振興に助力すると共に、浦幌町宝町に浦幌事業所を設置。丸岡繁喜氏を所長として、今日に続いている。

1972（昭和47）年12月23日に、留真を会場に開催されたシンポジウム「中浦幌駅通所と中川北松」の報告が、『浦幌町郷土博物館報告』に6回に渡り連載されている^{註8)}。このなかで、中川北松^{註9)}の長男政雄氏、長女シズ氏と、当時北海道池田高等学校の教諭で池田町史編さん室員だった山崎徹氏とが、次のようなやりとりをしている（博物館報告編集局 1975）。

中川正雄 活平へ広島団体が入った。
 中川シズ 朝日農場^{註10)}も広島だったわね。
 山崎 徹 理由がありまして、徳島と広島。あの辺の農家は藍を作っていたんです。その藍の栽培が特に日露戦争の後になってから染料が輸入されまして、所謂日本独自の藍という植物染料がダメになったんです。そういうことで、藍作物を田に転換できないものだから誘いによって、すぐ北海道に来た方が広島・徳島に多いんです。ただ私、中川さんの場合にむこうでは長男の方だと聞いて、普通、家族の中で次男の方の方が多い場合もあるんです。それから明治30年代にも大洪水があって随分あの辺がひどくなくなったことがあります。

ここで中川正雄氏が「広島団体」と述べているが、活平の場合は団体入殖ではなく、あくまでも個人の入殖である。

活平地区には、1905（明治38）年、先述の荒川時蔵のほか、沖本五兵衛、小野仁市、正木彌作、増田次郎、廣田小市、古川玉吉が広島から来て、朝日浅吉の管理する農場へ小作として入った（浦幌町史編さん委員会 1971；水野 1989）。中川シズ氏が「朝日農場も広島」と述べているのも、このことを指している。

『浦幌町史』（浦幌町史編さん委員会 1971）には、このとき活平へ入り、1911（明治44）年に川上へ移った古川定松の回想を記録している。広島から函館を経由して釧路港へ入り、活平の朝日農場へ家族9人が入ったという。

このほかにも、丸岡繁喜氏の聞き取りにもあるように、浦幌には広島県から入った人々が随所にみられる。一見すると団体入殖に見えるが、初期に小作に入った荒川ら同郷者の先人を頼って、いずれも個別に渡って来ているものであることがわかった。

本州から、こうした同郷者を頼って北海道へ入る形態は、団体入殖とともに十勝地方のその後の開発に

とって、大きな基礎となったのは間違い無いだろう。

なお、山崎徹氏が徳島や広島で藍生産の衰退と北海道入殖とを絡めて説明しているが、丸岡家と藍生産との関係は不明である。広島での藍生産は、江戸時代の博物書『和漢三才図会』にも名が出てくる古くからの産物であり、明治30年代初頭までかなりの生産量を誇っている。多くは沿岸域だが、川船を用いて安芸地方でも生産されていた。明治30年代後半には生産量も激減している。時期的にはむしろ、明治38年に活平入りしている荒川らに、なんらかの関係があるのかもしれない。詳細については今後の研究課題としたい。

丸岡キサノの絵馬奉納の背景

キサノの絵馬が奉納されたのは、浦幌へ渡って3年目となる1921（大正10）年9月である。キサノの絵馬奉納については、絵馬そのもの以外に記録は無く、奉納の理由などの詳細は不明である。

絵馬が、一般的な板に墨書きされたものではなく、刺繍によるものであることについても記録は無いが、聞き取りのなかで丸岡繁喜氏が述べているように、キサノはもともと手先が器用で、刺繍も得意だったようである。

大工の技術で商売を興そうと活気づく夫三一の隣で、不慣れな土地への進出に不安もあったことに違はなく、三一の商売の成功と、自らの生活も含む活平地区の発展と安定を願って、絵馬を奉納したのでだろう。これについて、丸岡繁喜氏のもとに残る、晩年にキサノが記した手記から、キサノの篤い信仰心が垣間見られるので、以下に転載する。

皆様にはお●で新春を向へられたの了何より
 かげ乍ら私喜んで安心致しました
 十二月十三日の御手紙ありがたう御座いました
 すぐ返事を出すと思ひ乍ら今日迄のびのびして
 御面^{ママ}なさいね
 どーも済みませんでした サイソクしてね
 私も母さんの前があるのでね
 私方でもお蔭様で皆なそろって五十二年の新春
 を向へましたるは神佛様のお蔭様と喜ん^{ママ}
 居ります
 私もシンケツ^{ママ}が少しづゝ良く成り今朝
 免^{ママ}のみ仏様へお礼するのとご飯を頂く時
 だけオスワリが出来る用になり其の外は今仕事
 所もヒマですし私自分運動とストーブ^{ママ}
 のそばイスに守りしてもらって居ります
 私元よりあまり身体の丈夫でなかつたのですが
 おじいちゃんが死亡してからなんだかがっかり
 したようです
 暖くなったら丈夫になると思います

今家の2番目孫か十二月二十五日帰って居り来十五日は成人式ですから北見へ行くのです
イドーショメイ^{〔ママ〕}*が北見へ持って行って居るのです
貴女も体に自由分^{〔ママ〕} 気を付け おぢいさんの三年忌にはお参りして下さいね
では皆々様宜しくお傳へ下さい
浦幌方面は雪は今所三回しかありません
これから何ほど降か分かりません

人間は神様で生れ
み仏様で育つ
人間はずか五十年
花にたとへて朝顔の
朝顔の夜にしをれる朝顔さえも
●限にすぎりてしまする
心ゆくよりもろき 身をもちて
なぜにごしょーを願はや
ありがたや
お立ち向ひのみ仏様は
今日は来るか あす来かと
お待ちばしけのみ佛様よ
行くのぢやござらぬ かへるでござる
あーありがたや

〔●は判読不明箇所〕

* イドーショメイ→異動証明(住民票関係)のことか?

文面から、書き記したのは1977(昭和52)年の1月と予想される。文中に「おじいちゃん」とあるのは、1975(昭和50)年に他界した三一のことと推察できる。

実際にキサノが他界するのは、この6年後の1983(昭和58)年である。しかし、この手記をみると、三一に先立たれて気落ちしている様子がかがえ、御仏からの「お迎え」を待つ気持ちが綴られている。文面全体から、神仏への篤い信仰心が読み取れる。若い頃に絵馬を奉納したときも、同じように篤い信心からなのだろう。

絵馬に「広島県人」と記していることについても、故郷広島に対する望郷の思いを示すもののようである。しかし、この「広島県人」という表記は、いまやキサノの想いを越えて、歴史資料の側面がある。

『浦幌村五十年沿革史』『浦幌町史』『浦幌町百年史』(浦幌町百年史編さん委員会 1999)ともに、本町における広島からの移住についての記載は乏しい。昨今では、浦幌の開拓期の本州からの移住者は「富山、石川、岐阜など中部方面から」と語られることが多く、広島からの移住が語られることはほとんどみられない。

しかし、明治末期から活平地区に広島県からの移住者が固まっていた時期があり、朝日農場なども関わりながら、浦幌の近代史を形成する礎をなしたという歴史について、キサノの絵馬は貴重な証言となっている。



図11 浦幌駅近くの浄福寺にある丸岡家の墓。丸岡キサノ、三一、栄三(長男)が眠る。2020年2月29日撮影

そうした活平地区の歴史資料としての記録性、丸岡三一という名工との関係性、刺繍絵馬という特殊性、浦幌に現存する社寺絵馬としては二番目に古いという資料性の観点から、この絵馬は浦幌町の有形文化財に指定することが望ましいと考えられる。現在、浦幌町文化財保護審議会にて検討をするべく、博物館で準備を進めている。

おわりに

故郷の広島を離れ、不慣れな北海道の浦幌で65年間を過ごし、三一と家族を支え続けたキサノは、1983(昭和58)年3月23日に、88歳で他界した。墓所は、これもかつて広島からの移住者が住職を務めていた浄福寺(浄土真宗西本願寺派)である。キサノはここに、夫の三一、息子の栄三氏と共に眠っている(図11)。

謝 辞

丸岡家の沿革について、北広島市在住の丸岡繁喜氏には、聞き取り、資料や写真の借用など、調査にあたってご協力いただいた。浦幌町の荒川和子氏にも、資料や情報の提供をいただいた。活平神社の調査にあたり、浦幌神社宮司の背古宗敬氏、活平神社管理者の阿部優氏、博物館実習生(帯広畜産大学大学生、当時)の元木咲氏に協力いただいた。『活平の歩み』の調査にあたり、帯広百年記念館所蔵の「井上壽資料」を使用し、同館の大和田努学芸員に協力いただいた。

皆様に深謝したい。

註

- 註1) 丸岡三一の生没年については、丸岡繁喜氏の資料に記述があったが、丸岡キサノの生年については不明であった。そこで、本報におけるキサノの生年については、浦幌町本町の浄福寺境内にある丸岡家の墓石に掘られている、キサノの年齢および没年から算出したものである。
- 註2) 広島県三次郡川地村下志和地は、1898（明治31）年に三次郡と三谿郡が合併して双三郡となったことにより双三郡川地村下志和地となり、1956（昭和31）年に川地村が双三郡から三次市へ編入されたことにより、三次市下志和地町となった。
- 註3) 川地尋常小学校か志和地小学校のいずれかを指すと思われるが、現在調査中。川地尋常小学校は1896（明治29）年に上志和地尋常小学校と下川立尋常小学校を合併して川地尋常小学校と改称した際に、高等科2年を併設している。志和地小学校の明治・大正期の実態は不明。両校は2012（平成24）年に統合し、現在は三次市立川地小学校となっている。
- 註4) 広島県高田郡小田村大字下小原は1956（昭和31年）に合併して高田郡甲田町へ編入し、さらに2004（平成16）年に甲田町が合併して安芸高田市へ編入されたことにより、安芸高田市甲田町下小原となった。
- 註5) 丸岡繁喜氏の調べでは、荒川時蔵が広島から活平へ入った年月日として「明治39年2月14日」という記述がある。今後、文書記録などを照合する必要があるが、本報では、『浦幌村五十年沿革史』（浦幌村社会教育協会1949）や『活平の歩み』（水野1989）の記述によった。
- 註6) 丸岡繁喜氏の父にあたる丸岡栄三氏が2000年5月に書き残した手書きの手記「北海道移住～昭和20年代までの流れ」による。この手記はコピーが丸岡繁喜氏の手元に残っているが、原本はみつかっていない。栄三氏の視点から、丸岡家の活平から留真への移転、さらに宝町への移転について綴られている。丸岡繁喜氏所蔵。
- 註7) 浦幌炭鉱は1918（大正7）年の開坑。当初から毛無、常室と共に留真に坑口を置いたが、常室と留真は条件が悪く、ほどなく毛無のみからの出炭となったされる。留真坑口が再開したのは1933（昭和8）年とされる。
- 註8) 『浦幌町郷土博物館報告』の第2号（1973）から第7号（1976）にかけて「中浦幌駅通所と中川北松」と題して連載されている、シンポジウムの記録集。
- 註9) 中川北松（1869-1951）。福井県出身で、1896（明治29）年に北海道へ渡り、1年間を渡島地方で過ごしたのち、翌年に十勝へ入った。熊谷農場へ

入ったが、1908（明治41）年に留真へ中浦幌駅通所を開設することになると、妻のあき（1880-1960）と共に駅通の管理人を務めた。

- 註10) 1898（明治31）年に、当時すでに生剛、下浦幌地区で農場経営に着手していた熊谷泰造が、橋本順造と連名で、活平から喫茶牛付近までの牧場貸付を受け、上浦幌熊谷農場と呼ばれた。1904（明治37）年5月に熊谷農場の土地が熊谷泰造、鷺見邦司、橋本順三の三氏に分割され、このうち下川流布から活平口に至る土地は鷺見邦司の領分となり、管理者として当時円山に居住していた朝日浅吉が就いた。1908（明治41）年に上浦幌駅通所の管理人となった朝日は、それを機に活平へ移住し、農場の管理と鷺見農場の管理をこなした。この頃から、鷺見農場は管理人の名をとって朝日農場とも呼ばれている。
- 註11) 「丸岡キサノ（祖母）の手記」。丸岡栄三氏の遺品から見つかったものとされる。文面から、執筆は1977（昭和52）年1月で、内容は前年末に受けた手紙への返信である。丸岡繁喜氏所蔵。

引用文献

- 博物館報告編集局，1975．中浦幌駅通所と中川北松（V）．浦幌町郷土博物館報告，6，：2-6．
- 事業部記念誌係，1976．開校七十年記念誌かつひら，p27．活平小学校開校七十周年記念祝賀協賛会，浦幌．
- 水野勝次，1989．活平の歩み．自費出版．
- 持田誠，2019．厚内神社史．浦幌町立博物館紀要，19：9-11．
- 浦幌町史編さん委員会，1971．浦幌町史．浦幌町役場，浦幌．922pp．
- 浦幌町百年史編さん委員会，1999．浦幌町百年史．浦幌町役場，浦幌．823pp．
- 浦幌村社会教育協会，1949．浦幌村五十年沿革史．浦幌村役場，浦幌．424pp．